

新世界との対峙
—ニューイングランド文学とバイオリージョナリズム—

星野 勝利

Who hears the fishes when they cry?

----- Thoreau, *A Week on the Concord and
Merrimac Rivers*

... it is but well to be on friendly terms with all the
inmates of the place one lodges in.

----- Melville, *Moby-Dick*

はじめに

ロングアイランドに住むさる若者が、その地を去るに当たり、宅地の前の浜辺に寝ころぶ。遠くに点滅するフェリーの明かりを眺めながら、この若者は夕闇の中でこの土地の過去のことに関心を馳せる。オランダ人船乗りたちが始めてこの地を目にした時、いまでは高級住宅地と化したこの場所は、見渡す限り樹木と花に覆われた「新世界という鮮やかな緑なす乳房」（9章）の世界であった。

隣家の青年ギャツビーについて語る『グレート・ギャツビー』（*The Great Gatsby*）の語り手ニックは、ロングアイランドを去るにあたり、隣人ギャツビーと新世界アメリカとの関係について思いを巡らす。かつての緑の世界は宅地に姿を変えてしまったが、この高級住宅地に住むことを生涯の夢とした青年ギャツビーにとって、この夢に向かって生きることは、ニックの見るところ、黒々と不気味に広がる「共和国の平野」に「ボート」を漕ぎ出し、「陶酔に満ちた未来」（同前）を目指すことと等価であった。

『白鯨』（*Moby-Dick*）の語り手イシュメイルは、捕鯨について語る。ロングアイランドに隣接するマンハッタン街の街に住むこの若者は、街を後にして、捕鯨基地に向かう。青年ギャツビーが「陶酔に満ちた未来」に向けて「ボート」を漕ぎ出したように、青年イシュメイルは、「遙かなるもの」としての鯨を求めて、勇躍「世界の海原」（1章）に船出する。

語り手ニックは、ギャツビーの生の在りようを、場所と時間の関係で捉える。共和国アメリカという一つの場所と歴史との関係で眺める。イシュメイルの場合はどうか。捕鯨船やエイハブ船長の在りようは、場所や時間とどのように関わる

ものなのか。そもそもアメリカ文学において、場所（土地）や時間（歴史）は、どのような意味をもつものなのか。

1. 麗しのメリマック

メルヴィルの作品では多くの若者が海に出る。処女作『タイピー』(Typee)、次作『オムー』(Omoo)、続く作品『マーディ』(Mardi)では、捕鯨船で海に出た若者が、南の島々で冒険に満ちた人生を送る。捕鯨船での海行きの構図は、青年時のメルヴィルの個人的体験とも重なり合う。

海に出た若者たちは、故郷としてのアメリカのことをしばしば思い浮かべる。『レッドバーン』(Redburn)では、商船でイギリスに向かった若者レッドバーンが、リバプールでドイツ人移民の姿を目にする。新世界を目指す移民の姿に、青年レッドバーンは、「地上の楽園」「彼岸の世界」(3章)としての故郷アメリカを思い浮かべる。一方、『ホワイト・ジャケット』(White Jacket)では、アメリカの軍艦に乗り込んだ若者が、鞭打ちという陋習を目の当たりにして、アメリカ人のあるべき姿を思う。アメリカ人とは、「地上の大陸一個を支配する当然の権利を与えられている」「特別に選ばれた民」であり、「新世界に新たな道を切り拓くべく未開の荒野に送り出された前衛」(36章)のはずである。

時代を遡って、ヨーロッパからアメリカに向かった巡礼始祖(Pilgrim Fathers)たちは、新しい世界を築くべく、旧世界から新世界に向けて船出した。「彼岸の世界」としての新世界を目指すこの旅は、「地上の楽園」を目指す旅でもあった。大西洋を横断して、緑に覆われたコッド岬をようやく眺めた時、巡礼始祖たちの心は、解放と安らぎの思いで満たされた。ブラッドフォード(William Bradford)にとって、岸边まで緑に覆われたこの新世界は、期待に違わず、旧世界と異なり、「住むのに適した稔り豊かな地(fruitful and fit for habitation)」(Of Plymouth Plantation, Gatta, 18)と見えた。

しかし、現実のコッド岬は、必ずしもこの期待を満たしてくれるものではなかった。緑と見えた世界は、実際は野獣や野人に満ちた「荒野(wilderness)」でしかなく、この世界で生きるには、次のように、「神の恩寵(Spirit of God and His grace)」を信じるしかなかった。

What could now sustain them but the Spirit of God and His grace? May not and ought not the children of these fathers rightly say, "Our fathers were Englishmen which came over this great ocean, and were ready to perish in this wilderness; but

‘they cried unto the Lord, and he heard their voice and looked on their adversity.’
 (Mourt’ s Relation, Gatta, 19)

恩寵としての新世界。以後、この視点が、移住した人々の意識の在りようを定める。アメリカ最初の女性詩人とされるブラッドストリート (Anne Bradstreet) は、1630年、アラベラ号でアメリカに移住する。壊血病等で多くの人命が奪われた3ヶ月の船旅の後、新世界での生活は、病気や火事も加わり、過酷なものとなった。しかし、父親が植民地知事を務める環境の中で育った彼女は、政治、歴史、医学、神学などとともに、詩の世界に強い関心を示す。新しい生活の場としてのニューイングランドの自然の姿にも、詩人としての目を向ける。詩「瞑想」(Contemplations) は、次のように始まる。

Something now past in the Autumnal Tide,
 When Phoebus wanted but one hour to bed,
 The trees all richly clad, yet void of pride,
 Were gilded o’ re by his rich golden head.
 Their leaves and fruits seem’ d painted but was true
 Of green, of red, of yellow, mixed hew,
 Rapt were my senses at his delectable view.

緑の葉が赤や黄に衣替えするニューイングランドの秋景色。旧世界イギリスから船出して、大西洋を横断し、セイレムで生活を始めた彼女は、現在のボストンからケンブリッジ、イプスウィッチ、アンドーバーへと移動する。上記冒頭の一連は、アンドーバー近郊を流れるメリマック川の風景とされる。夕日に染まる美しい秋景色が詠われるこの一連には、新世界アメリカで彼女が体験する「心地よい眺めの感覚 (senses at his delectable view)」が満ちあふれている。

この「感覚」は、詩人の内奥に宿る確固たる思いに基づく。続く第二連は、次のように始まる。

I wist not what to wish, yet sure thought I,
 If so much excellence abide below,
 How excellent is he that dwells on high?
 Whose power and beauty by his works we know.

以下、33連232行から構成されるこの詩で、彼女は、自分の生きる世界をエデンの園として眺め、そのエデンを司る太陽(Phoebus)について詠い、樹木について詠い、イナゴやバッタ、川の魚、そして美しくさえずる小鳥など、身の回りの小さな生きものたちについても詠う。身の周りの自然を観察すること、それが彼女の「瞑想」であるが、この自然とは、清教徒としての白人移住者たちが入植してまだ間もないころの新開地ニューイングランドである。この世界は、後代の遅れてきた青年としてのニックやレッドバーンに言わせれば、「鮮やかな緑なす乳房」の世界であり、「地上の楽園」の世界である。メリマック河畔のこの世界は、予定調和に満ちたエコロジカルな世界であり、生きものたちを優しく育む緑のパイオスフィアでもある。

詩人ブラッドストリートは、この世界に、「力と美(power and beauty)」を認める。「高い所に住む彼 (he that dwells on high)」の「作品(works)」としての「力と美」である。「高い所に住む彼」とは、詩の中では、天空を移動する「太陽」を意味する。しかし、この「彼」には、更に高い存在としての「神」の姿が重なり合う。美しい河畔の世界の創造者としての神。緑の世界で瞑想に耽るこの詩人の姿には、自然や生きものたちを通して顕わになる神の「恩寵」への敬虔な想いが漂う。これが随所に認められる点で、詩「瞑想」は、ブラッドフォードを始めとする巡礼始祖たちの新世界への想いを実証する詩となる。

2. 子熊の悲しみ

河畔のオークの樹の下で瞑想にふけるブラッドストリートは、メリマック川を泳ぐ魚や小鳥に、次のように呼びかける。

Ye Fish which in this liquid Region 'bide
That for each season have your habitation,
Now salt, now fresh where you think best to glide
To unknown coasts to give a visitation,
In Lakes and ponds, you leave your numerous fry.
So Nature taught, and yet you know not why,
You watry folk that know not your felicity. (ll. 162-8)

O merry Bird (said I) that fears no snares,
That neither toils nor hoards up in thy barn,

Feels no sad thoughts nor cruciating cares
 To gain more good or shun what might thee harm--
 Thy clothes ne'er wear, thy meat is everywhere,
 Thy bed a bough, thy drink the water clear--
 Reminds not what is past, nor what's to come dost fear. (ll.183-9)

「水の世界 (liquid Region)」に住む魚たちは、「自然 (Nature)」の教えに従い、湖や池を後にして、川を下り、大海へ向かい、再び川を遡上する。しかし魚たちは、この「至福(felicity)」について知ることがない。木陰でさえずる小鳥たちも同様である。悲しみや苦しみとは無縁のまま、畏をおそれることもなく、終日仲間とさえずり明かし、木陰に息み、のどの渇きを清らかな水で癒す。瞑想する河畔の詩人の眼が向かうのは、平和に満ちた生きものたちの世界である。

しかし、巡礼始祖の末裔たちが住むニューイングランドは、常にこのような世界であったわけでもない。ニュージャージーの農家の息子として生まれたウルマン(John Woolman) は、『日記』(*The Journal*) で知られる。クェーカー教徒として奴隷制反対の主張を繰り広げたウルマンは、布教活動の原点となった一つの体験についてその冒頭に記している。少年時に自分が冒した次のような行為である。

I may here mention a remarkable circumstance that occurred in my childhood.
 On going to a neighbor's house, I saw on the way a robin sitting on her nest, and as I came near she went off; but having young ones, she flew about, and with many cries expressed her concern for them. I stood and threw stones at her, and one striking her she fell down dead. At first I was pleased with the exploit, but after a few minutes was seized with horror, at having, in a sportive way, killed an innocent creature while she was careful for her young. I beheld her lying dead, and thought those young ones, for which she was so careful, must now perish for want of their dam to nourish them. After some painful considerations on the subject, I climbed up the tree, took all the young birds, and killed them, supposing that better than to leave them to pine away and die miserably.
 (Chapter 1)

出来ごころで親鳥を殺したウルマン少年は、ひな鳥もすべて殺すことになる。少年にとってこの行為は、「やさしい慈悲 (tender mercies)」の行為のはずであった。しかし、少年ウルマンは、結果として生きものの命を暴力的に奪った自己の行為に、激しく懊悩する。後のウルマンの説教師や社会活動家としての歩みが、

ここから始まる。人間が平等であることへの強い思いも、出発点は、小さな生きものに対して冒した少年時代の行為への強い後悔の念に基づいている。きわめて倫理的かつ宗教的 (theocentric) というべき思いである。

新世界最初の植物学者として知られるジョン・バートラムの息子ウィリアム・バートラム(William Bartram) は、ウルマンと同じくクェーカーであった。後に旅行者として知られるウィリアムは、父の植物採集の旅に同行し、ニューイングランド各地を旅する。1776年、南方フロリダ方面を旅したウィリアムは、その時の旅の様を『旅』(*Travels Through North & South Carolina...the Manners of the Indians*) に著す。ワーズワースやコールリッジ、シャトブリアンなど、ヨーロッパ・ロマン派にも影響を与えたこの旅行記で、ウィリアムは、土地の様子やインディアンのことともに、多様な姿を見せる樹木や草花、大小さまざまな動物や生きものたちについて、挿絵を添えて詳細に報告する。「自然が生みだしたもの(productions of nature)」としての生きものの姿を正確に伝えることは、ウィリアムにとっては「偉大なる全能の創造者 (the Great Almighty Creator) の無限の力と威厳と完璧さを讃えること」(Gutta, 49) に他ならない。

しかしウィリアムは旅の途上で一つの出来事に遭遇する。モスキート川を遡上した際、同行の一人が川縁を歩く一頭の熊を射殺する。その死体に近づいた子熊にも銃口が向けられた時、ウィリアムは「同情の念で心を動かされた」(“Introduction,” Gutta, 52)ものの、それを制止することができない。結果として子熊もまた犠牲となる。『旅』の中でウィリアムは動植物や人間の共通点についてしきりに言及する。差異はあるものの、生きものとしてはすべてが大いなる類似性を抱えているのである。母熊の死体を前にした子熊の表情は人間と変わらないものであり、これを見殺しにした自分にウィリアムは心を痛める。ウルマンと同様である。

時代を下って、18世紀後半、クーパー(James Fenimore Cooper) の『開拓者』(*The Pioneers*) でもクェーカー教徒が現れる。ニューヨーク州北部の開拓地で司法を司るテンプル判事である。この判事は、新開地の法の番人として、禁猟期の法を破った森の住人ナティ・バンポーを拘留する。インディアン的生を送る白人バンポーとテンプル判事の間には、自然と文明の対立の構図が現れる。作品冒頭で示されるように、18世紀後半のこの時代は、旧世界から押し寄せた白人開拓者たちが、「永遠の進歩 (permanent improvement)」を信じつつ、「荒野 (wilderness)」としての森を破壊し、生きものたちを蹂躪し、「恵まれた自然の開発 (development of the natural advantage)」に競って参加していった時代であった。

The expedients of the pioneers who first broke ground in the settlement of this country are succeeded by *the permanent improvements* of the yeoman who intends to leave his remains to moulder under the sod which he tills, or perhaps of the son, who, born in the land, piously wishes to linger around the grave of his father. Only forty years have passed since this territory was *a wilderness*. Very soon after the establishment of the independence of the States by the peace of 1783, the enterprise of their citizens was directed to *a development of the natural advantages* of their widely extended dominions. (Chapter 1, italics mine)

渡り鳥の大量虐殺もこの「進歩」と「開発」に関わる。春を迎える湖畔の開拓地に、ある日突然、鳩の大群が押し寄せる。判事一家を含め、開拓地の住民は、老若男女、猟銃やピストルや弓矢を手に家を飛び出し、一斉に鳩狩りを始める。羽毛は当時貴重で高価な商品であった。この光景を見てバンポーは、「自ら造りだした生きものたち(his creatures)が無駄に殺されていくのを、主(the Lord)は黙ってみていることはない。鳩や生きものたちの正義は必ずや果たされる」(22章)と口にする。生きものは最低限の数だけ獲ることに固執するインディアンのバンポーのことばを受けて、拘束する立場にある法の番人テンプル判事は、クエーカー的視点を思い出したかのように、こう応える。

“Thou sayest well, Leatherstocking....and I begin to think it time to put an end to this work of destruction.” (Ibid.)

「進歩」により破壊される自然。「開発」により蹂躪される生きものたち。「主」の怒りへの恐れ。ここにもまた自然や生きものたちに対する多分に宗教的(セオセントリック)な想いがにじみ出る。エコロジカル・コンシャンス、あるいはバイオティック・コンシャンスともいうべき心性である。植民地時代や建国時代の日誌や旅行記、あるいはロマンスに点在するこの心性は、新世界の時間の流れの中で、巡礼始祖以来の開拓者の意識の中に脈々と流れているものである。

3. 鉄の馬

『開拓者』の舞台であるニューヨーク州北部より更に北に、自然に恵まれた広大な領域が広がる。アディロンダック(Adirondack)と呼ばれる地域である。先住民アルゴンキアン・インディアンの名前に由来するこの地域は、ハイキング、フィッシング、ハンティング、カヌー、ラフティングなど、アウトドアスポーツのメッカとして知られる。19世紀中頃の1858年、はるばるボストンから一つのグ

ループがこの地を訪れる。グループの一人エマソンは、この時の体験を詩「アディロンダック」(“The Adirondacks”) に記している。

エマソンにとって「自然」は大いなるテーマであった。若くして発表したエッセイ集『自然』(Nature, 1836)はその証左である。青年エマソンは、裸形の自然の中に一人立つことで、「透明な眼球となり、無となり、すべてを透視し、普遍者の流れが体内を巡り、自分は神の一部」(“Nature”)となる。この時から約20年後、50歳を超えたエマソンが、アディロンダックの「自然」へ向かう。青年期の観念的な「自然」とは異なり、いま歩みいる「自然」は、極めて具体的、かつ現実的である。馬車を乗り継ぎ、ガイドを雇い、花やカワカマスやシカやコガモが生きる世界を、一行はキャンプ地に向けてひたすらボートを進める。

By the bright morn *the gay flotilla* slid
 Through files of flags that gleamed like bayonets,
 Through gold-moth-haunted beds of pickerel flower,
 Where the deer feeds at night, the teal by day.
 On through the Upper Saranac, and up
 Pere Raquette stream, to a small tortuous pass
 Winding through grassy shallows in and out,
 Two creeping miles of rushes, pads and sponge
 To Follansbee Water and the Lake of Loons. (ll. 16-25, italics mine)

エマソンが身を置く「自然」は、ブラッドストリートやウルマン、あるいはバートラムやバンポーのそれとは、かなり異なる。ルイス・アガシやジェームズ・ラッセル・ローウェルというハーバードの教授たちとのこの旅は、すでに開拓された場所に向かう「楽しい船団 (the gay flotila)」による憩いの旅である。旅自体へのこころの葛藤といったものは、どこにも見当たらない。それどころか、憩いの中で一行は、キャンパーが残した雑誌の記事に目を止め、歓声をあげる。大西洋横断海底ケーブルの敷設成功を告げるこのニュースは、「従前のすべての道を転換する新発見の思索の道 (“thought’s new-found path / Shall supplement hence all trodden ways”)」(ll.245-6)であった。エマソンが手に入れたのは輝かしい科学の勝利を伝える最新のニュースであった。文明の進歩を伝えるこのニュースに、一行は心をときめかせる。

ソーローも旅の途上で捨てられた新聞を手にした体験を持つ。1839年8月、22歳のソーローは、コンコード川を下り、メリマック川を遡上して、ニューハンブ

シャーに向かう。途中でボートを降り、登山を試みたソーローは、山頂で捨てられた新聞を手にする。それに目を通したソーローは、新聞の価値が、事実や実態を正確に伝えることにあることを思う。天気予報やビジネス関係の記事に比べれば、感情のこもった意見や論説は、所詮「浅薄ではかない (shallow and flimsy) 」 (“Tuesday”) ものでしかない。

旅の途上でも、この視点は青年ソーローを支配する。緑の岸辺に覆われたコンコード川は、一見したところ、太陽の優しい日差しを受けて生きものたちが生きる平和な世界である。

The sun lodged on the old gray cliffs, and glanced from every pad: the bulrushes and flags seemed to rejoice in the delicious light and air: the meadows were a drinking at their leisure: the frogs sat meditating, all sabbath thoughts, summing up the week...

(“Sunday”)

しかし、正確な事実に関心を向けるソーローにとって、一見予定調和に満ちた平和なこの世界には、一つの事実が隠されている。ボートの旅を通してソーローが知るのは、ダムや運河や工場の建設によって生じた次のような現実である。

Salmon, Shad, and Alewise, were formerly abundant here, and taken in weirs by the Indians, who taught this method to the whites, by whom they were used as food and as manure, until the dam, and afterward the canal at Billerica, and the factories at Lowell, put an end to their migrations hitherward. (Ibid.)

消滅したのは魚だけではない。川の旅でソーローが繰り返し考えさせられるのは、先住民インディアンと入植した白人の歴史である。河畔のインディアンの平和な世界に、ある日突然入植者が現れ、家を建て、土地を耕し、囲いをつくり、松を切り、故国の果樹の種をまき、橋を架け、家畜を放し、雑草を刈り、ビーバーやカワウソやマスカラットの家を壊し、鎌の音で鹿や熊にも脅しをかける。結果として、「白人の植物モウズイカがインディアンの畑のトウモロコシに取って代わり、イギリス伝来の香しい植物が新しい土地に根を張る」(同前) ことになる。

ボートの旅でこのような思いを持ったソーローは、旅を終えるに当たり、こう記す。

Men nowhere, east or west, live yet a *natural life*, round which the vine clings, and which the elm willingly shadows.... He needs not only to be spiritualized, but *naturalized*, on the soil of earth. (“Friday,” italics mine)

「大地 (earth)」と一体化した「自然化 (natural /naturalized life)」。さながらこれを実践するべく、ソーローはウォールデンの森に入る。森の中のソーローは、海底ケーブルの出現に興奮を隠せなかったエマソン一行とは異なり、「野生という強壮剤(the tonic of wilderness)」（Walden, “Spring”）を求めて、太古以来「幾多の民族が、水のみ、深さを図り、消滅していったウォールデン湖”(“The Ponds”)のほとりで、「人生の本質的な事実 (the essential facts of life)」（“Where I Lived, and What I Lived For”）の探求に向かう。

これが「自然化」の旅とするならば、この旅にソーローを駆り立てるエネルギーは、インディアンを追いやり、魚の世界を奪い、植生をも破壊する文明化という大きな力への懐疑の念である。「あの悪魔のような鉄の馬 (devilish Iron Horse) は、森の若葉をすっかり食い荒らしてしまった。復讐の槍 (avenging lance) を突き立てる我が国の英雄は、どこにいるのか」(“The Ponds”)とソーローは記す。ソーローが森に向かった頃、東部アメリカ社会では、「鉄の馬」すなわち「鉄道」が激しくごめき始めていた。青年ソーローの森への旅は、海底ケーブルと同様、文明の利器としてのこの馬に「槍をつきたてる」旅でもあった。生きものが生きる大地がすなわちバイオリージョンであり、バイオスフィアであるとするならば、旅人ソーローを導く磁石の針は、明らかにこの方向を指している。

4. 鯨の復讐

捕鯨船ピークオッド号のエイハブ船長は、船出して間もないある日、水平線に沈む太陽を眺めながら、航海に臨む自分の心について思う。一等航海士スターバックから「気の狂った狂人」であり「魔神」であるとされる自分をエイハブはこう規定する。「定めた目的に向かう自分の道は、鉄の軌道 (iron rails) なのだ。その上を魂が直進する。深い谷の上、深山の懐、渦巻く激流の底、自分はまっすぐに進む。この鉄の道 (iron way) を曲げる物は、何もない」(37章)。

鯨から採取される鯨油は、19世紀アメリカにおいては重要な資源エネルギーであった。ろうそくの原材料確保の産業として、捕鯨業は当時の最先端の産業であった。エイハブ船長の航海の第一の目的は鯨油求める経済的なものであるはずであった。しかし、スターバックが勇敢に糾弾したように、エイハブの目的は白鯨

への復讐となる。この目的をエイハブは「鉄の道」として認識する。復讐目的で鯨を追うことが、「鉄の道」という文明の成果と重なる。

エイハブの復讐は特定の鯨に向けられる。しかもこの復讐は、イシュメイルが繰り返し指摘するように、宇宙の構成原理にも関わる観念的なものである。しかし、捕鯨船が新世界から海に出るという構図は、植民地時代を経て、独立国家となり、いままた新産業国家として羽ばたこうとしているアメリカ社会の現実の姿と重なる。青年イシュメイルは「波止場に囲まれ、通商の波がそれを取り巻いて」(1章)いる国際通商基地マンハッタンを後にして、捕鯨基地ニューベドフォードに向かい、さらに前進基地ナンタケットに向かい、そこから「アレキサンダー王さながらに海の世界を蹂躪し征服した」(14章)ナンタケットの船乗りたちとともに、勇躍海に出る。海に出るイシュメイル、鯨を追うエイハブ、捕鯨船の船出。この軌跡は、新世界アメリカの産業グローバリズムの軌跡と重なる。

ウルマンやバートラムやソーローは、コマツグミヤクマヤサカナなど、生きものとの出会いについて語った。『白鯨』もまた生きものについて語る。海に生きる大動物としての「鯨」について語る。それも、徹底的に語る。鯨の種類について語る「鯨学」の章(32章)や、鯨の白さについて語る「鯨の白きこと」(42章)の章はその典型である。加えて、鯨の博物学、生態学、骨相学、考古学、文献学等、語り手イシュメイルの観察は丹念を極める。

白鯨を追跡して三日目、エイハブ船長は、この鯨に向かって、こう叫びつつ、鉞を投げる。

“Towards thee, I roll, thou all-destroying but unconquering whale; to the last I grapple with thee; from hell's heart I stab at thee: for hate's sake I spit my last breath at thee.”
(Chapter 135)

エイハブが最後に残したこの言葉は、鯨を追うエイハブの究極的な姿を象徴する。エイハブにとって鯨は「すべてを破壊する(all-destroying)」存在であり、自らが「地獄(hell)」に墮ちても許すことのできない「憎悪(hate)」の対象である。この思いは、ピークオッド号の乗組員全体の意思を呪縛する。闇の中で油を煮る場面に象徴されるように、「邁進し、蛮族を積み、火炎に満たされ、死屍を焼き、漆黒の闇を突進する」ピークオッド号は、「偏執狂の指揮者の魂を物質的に表示したもの(material counterpart)」(96章)と同じである。「ピークオッド」という船名が、白人に滅ぼされた先住民インディアンの部族名であるのも象徴的

である。白い鯨を追跡する行為は、入植した白人がインディアンを駆逐する行為とも重なり合う。

エイハブはこの鯨に「測りがたい悪意 (*inscrutable malice*)」(36章)や「捉えがたい悪 (*intangible malignity*)」(41章)を見る。しかも、「アダム以来の人間の怒りと憎悪」(41章)を代表するものとして、この「悪」のシンボルに挑む。しかし、物語りの中では、この「悪」は、むしろ相対的である。イシュメイルのみるところ、群れて泳ぐ鯨の姿には、さながら人間の家族のような優しさが満ちあふれ(88章)ている。殺戮行為のなかにあっても、鯨の行動には、生きものとしての本質的な凶悪さのようなものは特に見られない(87章)。「悪意」を見るエイハブ船長でさえも、死に行く鯨が必ず西の方角に反転する姿を見て、「信仰に燃えながら太陽に向かって滅び行くもの」(116章)としての一種の畏怖の念さえ抱く。それどころか、捕鯨船に追われて泳ぐ白い鯨は、「奪い取ったオイロパを麗しい角にしがみつかせたまま泳ぎ去る白い牡牛ジュピター神」のような「強く和やかな安定感」(133章)さえ漂わせている。

これに引き換え、悪意や凶暴さを漂わせるのは、むしろ鯨を追う人間の側である。ドログを使用した鯨の大量殺戮の方法(87章)は、殺される側にたてば残酷きわまりないものである。ピークオッドを密かに待ち受けるマレー海峡の海賊たちは、エイハブにいわせれば、「凶悪なアジア人ども(*rascally Asiatics*)」(同前)である。しかし、この海賊の凶悪さと鯨に対する捕鯨船の行為の間に、倫理性や悪の内質という点で大きな落差があるとは思われない。

海の世界は、エイハブ船長にとって、生きる場所としてすべてであった。ナンタケット人として「40年間、恐怖に戦いを挑み、40年間、平和な地上を捨てた」(132章)エイハブにとって、「地上に生まれたが、海に育てられ、山や谷が母親だったが、波浪が乳兄弟であった」(116章)という海の世界は、特別の意味を持つ一つの場所であった。ところがこの海は、イシュメイルにとっては、陸の世界と接続する。それも、開拓時代のアメリカの美しい自然と接続する。

There are the times, when in his whale-boat the rover softly feels a certain filial, confident, *land-like feeling* towards the sea; that he regards it as so much *flowery earth*; and the distant ship revealing only the tops of her masts, seems struggling forward, not through high rolling waves, but through the tall grass of a *rolling prairie*: as when *the western emigrants' horses* only show their erected ears, while their hidden bodies widely wade through the amazing verdure. (Chapter 114, italics mine)

新世界と等価の場所としての海。この海で、エイハブは鯨を追い、イシュメイルはその次第をつぶさに観察する。表面は平和な海の世界も、その底には恐怖が潜んでいることも、身を以て体験する。体験の舞台となる海の世界が、新世界の歴史と重なるものだとすれば、エイハブやイシュメイルの旅は、新世界に移住した白人たちの旅と重なる。平和な海の世界は、緑のメリマックの河畔の世界でもあり、巨大な鯨との出会いは、先人たちが体験した生きものたちとの出会いやインディアンとの出会い、すなわち新世界アメリカの生命体すべてとの出会いと、連続するものである。

ウォールデンの森に向かったソーローは、「鉄の馬」に向かって「槍」を投げるべき「英雄」を求めた。エイハブ船長は、鯨に向かって確かに「槍」を投げた。しかし、はたして「鯨」は、「鉄の馬」と等価な存在であるのかどうか。「鉄の馬」と見るべきは、むしろエイハブであり、捕鯨船である、ということにならないであろうか。この場合、復讐のベクトルは、鯨からエイハブへ、そして捕鯨船へと、向かう方向が逆転することになる。

おわりに

白鯨発見者への褒賞として、エイハブ船長は、大櫓にスペイン金貨を打ち付ける。アンデスの三つの峰が連想されるその図柄は、見るものにさまざまな想いを誘発する。エイハブ船長は、その図柄に、ふんぞり返った「魔王」や「火を噴く山」や「勝ち誇った鳥」を見て取り、それを自分と重ねて「みなエイハブだ」と豪語する。さらに、こう語る。

.... this round gold is but the image of the rounder globe, which, like a magician's glass, to each and everyman in turn but mirrors back his own mysterious self. (Chapter 99)

「地球 (rounder globe)」の象徴としての「金貨 (round gold)」。「球体」や「地球」を意味する「グローブ」から「グローバリズム」ということばが派生する。このことばが身近な日常語となって久しい。身近な経済や産業や情報の実態は、文字通りグローバルなものとなっている。鯨を追って海に出るエイハブ船長の旅が、新産業国歌アメリカの国の歩みと重なるとするならば、自我と自負を内在させた丸い球体としてのスペイン金貨は、国家アメリカの格好の象徴となる。

球体としての地球は、生態学的には生命圏 (バイオスフィア) とされる。球体の一部としての新世界アメリカは、生命圏の一部として、生命圏地域 (バイオリージョン) でもある。植民地時代以来、新世界の開拓の歴史は、「自然」や「荒

野」との関わりの歴史であった。これは同時に「バイオリージョン」との関わりの歴史でもある。ブラッドフォードやブラッドストリートは、この過程で、自然の厳しさや河畔の美しい風景の中に身を置いた。パートラムやウルマン、あるいはクーパーやソーローは、入植者に追われる存在としてのインディアンを含め、生命圏に生きるものたちに対して良心的な思いを寄せた。

北風が少し強く吹けばそれだけで「地球上の人間の生存には終止符が打たれる」(Walden, "House-Warming")とソーローはいう。他の生きものたちと同様、ホモサピエンスとしての人間は、地球という一個の球体の上で、永遠の存在であるわけではない。エイハブを呑み込んだ後で「五千年前と同じようにうねった」(135章)太平洋の波に比べれば、氷河期を前にした人間はきわめて小さい存在である。

小さな存在である以上、そのことへの敏感な感覚が人間には求められる。エイハブ的あるいはホモセントリックな感覚ではなく、バイオスフィリックな、エコセントリックな、あるいは「あらゆる場所はそれぞれ固有の目的で独自に存在している小さな世界」(McGinnis, 9) という意味での、バイオリージョナルな感覚である。開拓時代から19世紀に至る新世界アメリカの旅は、このことを国家的に確認する旅でもあった。

参考文献

- Bartram, William. *Travels Through North & South Carolina...the Manners of the Indians*.
 <<http://docsouth.unc.edu/nc/bartram/bartram.html>>
- Bradford, William. *Mourt's Relation*. <<http://members.aol.com/calebj/mourt.html>>
 ———— *Of Plymouth Plantation*.
 <http://members.aol.com/calebj/bradford_journal.html>
- Bradstreet, Anne. "Contemplations" <<http://rpo.library.utoronto.ca/poem/210.html>>
- Cooper, James Fenimore. *The Pioneers*.
 <<http://www.online-literature.com/cooper/pioneers/>>
- Emerson, Ralph Waldo. "The Adirondacs" *Poems. The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*. AMS Press, 1979.
 ———— *Nature, Addresses and Lectures. The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*. AMS Press, 1979.
- Fitzgerald, Scott F. *The Great Gatsby*. New York: Charles Scribner's Sons.
- Gatta, John. *Making Nature Sacred: Literature, Religion, and Environment in America from the Puritans to the Present*. New York: Oxford UP, 2004.

McGinnis, Michael Vincent. *Bioregionalism*. New York: Routledge, 1999.

Melville, Herman. *Redburn. The Works of Herman Melville*. The North-Western Newberry Edition, 1969.

————— *White Jacket. The Works of Herman Melville*. The North-Western Newberry Edition, 1970.

————— *Moby-Dick. The Works of Herman Melville*. The North-Western Newberry Edition, 1988.

Thoreau, Henry David. *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. Princeton: Princeton UP, 1980.

————— *Walden*. Princeton: Princeton UP, 1980.

Woolman, John. *The Journal of John Woolman*.

<<http://etext.lib.virginia.edu/toc/modeng/public/WooJour.html>>

(本稿は平成19-20年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号19520184の成果の一部である。)

(岩手大学教育学部英語教育科)